

將軍綱吉からの礼状

〈解説文〉

為歳暮祝儀
小袖一重到来、
歎思召候、委曲
阿部豊後守可
述候也

〈解説〉

歳暮として将軍家に小袖を献上したことに対する礼状である。

送り主は黒印の人物、五代将軍徳川綱吉である。

江戸幕府では、年始と八朔（8月1日、徳川家康江戸入城の日）に次いで、人日（正月7日）・上巳（3月3日）・端午（5月5日）・七夕（7月7日）・重陽（9月9日）の五節句が重視され、毎年

歳暮祝儀として小袖一重到来、歎び思し召し候、委曲阿部豊後守述ぶべく候也

十二月二十九日　印（黒印）
内藤侍従殿へ

殿中儀礼が行われた。これは贈答をともなうもので、端午・重陽の節句及び歳暮には、諸大名が祝儀として将軍に衣服を献上するのが恒例となっていた。その返礼として、将軍から発給された御内書である。御内書の書面は幕府の右筆（ゆうひつ）によって記され、上下二つ折りにする折紙の形態をとる。

内藤侍従は、高遠領知以前の内藤家当主重頼をさす。若年寄・大坂城代・京都所司代を務め、摂津国・河内国など3万3000

〈用語の解説〉

- ・思し召す：「思う」「考える」の尊敬語。お思いになる。
- ・委曲：委細。詳細。
- ・阿部豊後守：老中の阿部豊後守正武。

うわぎ

石を領有した。重頼が従四位下侍従に叙任されたのは、貞享4

(1687) 年10月21日のことである。

『世乗三』元禄2年4月の条に「旧冬歳暮御祝儀として時服献
じられ候につき、御内書御頂戴なさる」として、同一の文面を引
用している。御内書の発給事務は、月番老中の阿部豊後守正武が
担当した。

内藤家資料には、他にも同様の御内書が十数通残されている。
宛名に「伊賀守」「大和守」と記したものもあるが、いずれも重頼
をさす。重頼が伊賀守となつた貞享元年から元禄3年に没するま
での間に発給されたものとみられる。

重頼の養嗣子となつた清長（清枚）が高遠領を幕府から与えら
れたのは、元禄4年のことであった。

【参考文献】

- ・新井敦史『武士と大名の古文書入門』天野出版工房
- ・日本歴史学会編『概説古文書学 近世編』吉川弘文館